

Those Extraordinary Twins の笑いについて

有 川 昭 二

I

Those Extraordinary Twins の Introduction と Final Remarks には、作家の云わば工房の秘密が明らかにされていて面白い。Mark Twain はこの題名のもとに、一つの短い物語——Mark Twain が写真で見たイタリア人の若い、異形の双生児についての fantastic な物語——を書くつもりであった。ところが途中でそれにもう一つ、他の話が加わり、予期していなかったその話の方がだんだんと大きくなって行って、両者の比重が逆転し、その間の関係を調整するのに苦労するようになった。ある人物を無理に殺したりして、何とか辻褄を合わせようとしたが、どうしても満足のゆく形に仕上げることができない。Mark Twain は熟慮の末、結局その原因が二つの物語を一緒にしているためだと判断し、最初の話の後から切り離してしまった。Mark Twain の云う帝王切開 (a kind of literary Caesarean operation) である。こうして取り出した作品を、Mark Twain はもとの題名のまま Those Extraordinary Twins として、“farce” に仕上げ、残った作品を Pudd'nhead Wilson として、はっきりと “tragedy” に仕上げたのである。私は前に Pudd'nhead Wilson (1894) を tragedy の立場から論じたが、¹⁾ ここでは云わばそれと血のつながった作品である Those Extraordinary Twins (執筆1892, 出版1894) を farce として論じてみたい。

II

この作品の主人公は、Pudd'nhead Wilson ではわき役を演じているイタリア人の双生児、Count Luigi Capello と Count Angelo Capello である。二人はしかしこの作品では実に異様な姿で現われる。題名に extraordinary という形容詞がついているのは、世にも稀なその怪奇性の故である。彼等は頭と腕は別々であるが、胴体と脚は一緒になった “conglomerate (塊状) twins” なのである。頭は二つ、腕は四本、胴体一、脚一の双生児である。

この異様な双生児が Mississippi 河畔の田舎町、Dawson's Landing に現われて、色々と事件をおこすのだが、前にのべたように Mark Twain の関心は farce にあり、場面々々の滑稽な “effect” が浮きぼりにされているだけで、事件そのものは Pudd'nhead Wilson の事件の一部を、二番煎じの形で出してあるに過ぎない。

話は「貴族」に弱い田舎町の母娘の会話から始まる。地方新聞の広告欄を頼って、下宿を申し込んできた双生児の手紙を前にして、それぞれの思惑から期待を抱く母娘の会話はずむ。

註 1) 鹿児島県立短期大学紀要第21号

特に娘 (Rowena) の直感は鋭く、そして娘心は可愛い。まだ見ぬうちから、*"the prettiest name"*, *"a sweet name"* 故に、Angelo の方が Luigi よりも handsome で、手紙を書いたのは Luigi で、それは Angelo が病気のためにちがいないときめてかかっている。何日か経ち、嵐のため船がおくれて、予定の日の真夜中に、一家あげて待ちうけている中に双生児が到着する。一家は双生児を一眼見て、肝をつぶす。幸いにも一寸挨拶しただけで、双生児はすぐ部屋にひっ込むが、その後で茫然自失の母娘は次のように描写されている。

The widow tottered into the parlor and sank into a chair with a gasp, and Rowena followed, tongue-tied and dazed. The two sat silent in the throbbing summer heat unconscious of the million-voiced music of the mosquitoes, unconscious of the roaring gale, the lashing and thrashing of the rain along the windows and the roof, the white glare of the lightning, the tumultuous booming and bellowing of the thunder; conscious of nothing but that prodigy, that uncanny apparition that had come and gone so suddenly-- that weird strange thing that was so soft-spoken and so gentle of manner and yet had shaken them up like an earthquake with the shock of its gruesome aspect.²⁾

一家はそれぞれの立場で、この異形の現実——双生児——を認める。母親 (Aunt Patsy Cooper) は帽子を取った双生児の、四本のうちのどの手が誰の手であるかにまごつき、自分の息子に向かって朝七時半に起こしてくれと一方が頼んだ双生児の、何も云わなかった他方は一体どうすればいいのかと頓珍漢な——しかし十分に人間的な——疑問を口にしながらも、根がいいだけに、雨にびしょ濡れの二人が風邪をひなかったか、或いは雨靴は乾くように外に置いてあったかなど、母親らしい気遣いを見せる。娘は人の好きそうな二人の態度、特にその *"noble"*, *"wonderful faces and handsome heads"* と *"shapely" hands* に執心する。二人の息子のうち心の優しい、おとなしい Henry はただ気の毒がるだけであるが、活発で企業心に富んだ Joe は、人目を惹くその姿に、見世物小屋を開いて金もうけすることを考え、*"It's just grand!"* と叫ぶ。

ところでこのような双生児に対して、次のような批判がある。「……見世物小屋の看板にでもありそうな怪奇的なあくどさと、悪趣味があるばかりである。第一、一目みてもぞっとする二頭一身の怪物が、白昼、普通の社会人のあいだに伍していけるものとは、どうあっても考えられない……」³⁾ 私はそうは思わない。私は此の世にはどんな事でも起り得ると思う。このような認識に立てば、作家は何も「白昼普通の社会人のあいだに伍していける」人物だけを取り上げる必要はない。例えば次のような描写がある。

"...They might have taken off each other's hats. Nobody could tell. There was just a

2) Mark Twain, *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (New York: Harper & Row) pp.216-217

3) 浜田政二郎、マーク・トウェン—性格と作品— (研究社)、P.152

wormy squirming of arms in the air--seemed to be a couple of dozen of them, all writhing at once, and it just made me dizzy to see them go.”⁴⁾

最初双生児に会った時の、母親の言葉である。或いは一夜あけて、双生児が食堂に姿を現わした時は

The new lodger, rather shoutingly dressed but looking superbly handsome, stepped with courtly carriage into the trim little breakfast-room and put out all his cordial arms at once, like one of those pocket-knives with a multiplicity of blades, and shook hands with the whole family simultaneously.⁵⁾

ある意味で、作家の醍醐味はこのような表現にこそあると私は思う。云わば人跡末踏の地に想像力と言葉の武器をひっさげて、大胆にわけ入ってゆくのである。Poeはこのような世界に作家としての生命を賭けたのであった。このようにして築き上げられた世界、そしてそこに仮託された、或いはその背後にある作家の思想——それが文学のすべてであると思う。

双生児の身の上はAngeloの話すところによると、両親はフロレンスの貴族で、政治的な理由でベルリンに逃れたが、財産も没収されて、そこで貧しく死んだ。二人は見世物にされて、二年間あちこち流浪し、食うや食わずの辛酸をなめた。

二人の相違点については、最初二人を迎えた母親の言によると、Luigiはきかぬ気の、皮膚の浅黒い“brunette”で、Angeloは優しい青い目と、薄いとび色の巻き毛と、生き生きとした顔色をした“blond”である。二人の色彩感覚について云えば、二人がつけている当時流行の幅広のネクタイは、色白のAngeloのが柔らかな桃色で、浅黒いLuigiのが燃えるような緋色である。更につっ込んで云えば、Angeloの言によると、Luigiは頑健で、男性的で、攻撃的で、病気一つしないが、Angeloはその反対である。面白いことに、病気がちのAngeloは薬も飲めない体質で、Luigiが替って飲んでくれるのである。AngeloはMethodistで、酒も煙草も飲まないが、LuigiはFree-thinkerで、酒も煙草も大好きである。Angeloによると、煙草は彼のprinciplesに反するsinなのである。Angeloはsensitive natureの持主で、内に秘めた高い誇りは一寸した侮蔑にあってもすぐ傷つき、気分は常に沈みがちである。逆にLuigiは生き生きとして疲れを知らず、lifeとspiritとenergyに満ちている。いきおい二人の好む場所は、Angeloにあっては教会であり、禁酒会の集りであり、Bible classであり、Luigiにあってはサーカスであり、競馬であり、ダンスホールなどである。

ところでこのような相反する二人の性格、いくらか図式的とは云え、陰と陽の二人の性格についての、次のような指摘は私も正しいと思う。「ブルックスはマーク・トウェンが内面的にたえず相戦う二つの要素をもっていて、その相剋に苦しんだことを論ずるにあたって、『風変

4) Mark Twain, op.cit., p.218 (下線は筆者)

5) Ibid., p.225 (下線は筆者)

りな双生児』に言及し、これを作者自身の精神分裂を象徴するものとしている」⁶⁾私はむしろ更に一步進めて、Mark Twainの、そして精神分裂のなどでなく、人間一般の、しかもnormalな意味における精神状態を象徴するものと云いたい。このような二面性は多かれ少なかれ我々は皆持っているし、この両者の対立、或いは相剋が、たとえどのような容貌の怪奇性なり、或いはただただユーモアの一種なりに包まれていても、そのもつrealityを否定することは出来ない。例えば Angeloは、陽気で、人に好かれるLuigiに対して、次のようなひがみを持っている。

By ill fortune Judge Driscoll had happened to touch his sorest point, i.e., his conviction that his brother's presence was welcomer everywhere than his own; that he was often invited, out of mere courtesy, where only his brother was wanted, and that in a majority of cases he would not be included in an invitation if he could be left out without offense.⁷⁾

或いは二人は一週間交替で脚を使用するのだが、その使い方についての Angelo の不満は
“Luigi, I often consult your wishes, but you never consult mine. When I am in command (of our body) I treat you as a guest; I try to make you feel at home; when you are in command you treat me as an intruder, you make me feel unwelcome...”⁸⁾

このようなAngeloのひがみにしろ、迷惑感にしろ、日常我々が経験する心理的事実である。ここにこの作品のもつrealityの一つの根拠があると私は思う。

III

今ここに一つの根拠と云ったのは、この作品には単なる我々の心理的事実を越える、より広い、より深い事柄がとり上げられているからである。事件としてはそれらは裁判であり、血闘であり、政治であるが、いずれにしろそれらが投げかける問題は、意外に広く、意外に深いように思われるのである。以下私は順を追うて、これらの問題を論じてみたい。

Pudd'nhead WilsonでおなじみのTom Driscollは、Sons of Liberty派の禁酒反対大集会の席上で双生児を侮辱し、立腹したLuigiに蹴とばされる。Tom Driscollは双生児を裁判に訴える。ところが被告側の弁護人 Pudd'nhead Wilson —— 彼にとっては初仕事である —— は、先ず次のように云って原告側の証人を困らす。

“Mr. Harkness,” said Wilson, “you say you saw these gentlemen, my clients, kick the Plaintiff. Are you sure--and please remember that you are on oath—are you perfectly sure that you saw both of them kick him, or only one? Now be careful.”⁹⁾

Wilsonは最後には双生児に蹴る動作を実演までさせて——脚は一つしかないので、二人のど

6) 浜田政二郎, *op.cit.*, p.150

7) Mark Twain, *op.cit.* p.236

8) *Ibid.*, pp.220—221

9) *Ibid.*, p.252

ちらが蹴るかは立証不可能である——原告側の三人の証人を、次々にやりこめる。二番目の証人は、酒のみのLuigiがあやしいと口にまでするが、決定的な証言は出来ない。裁判長は「暴行が行われたのは事実であり、双生児の二人がそれを為した事を立証するのが不可能だからといって、二人とも罪を逃れることは許されない」と云って、原告側に分割して訴訟をするようにすすめる。その根拠は前にも一寸ふれたが、二人が一週間交替で脚を使用する、そしてその交替は厳格に守られているということである。新たに二人の証人が呼ばれる。一人は「集会には出たくはないが、止むを得ず行かなければならない」というAngeloの言葉と、「俺はどうしても出かける」というLuigiの言葉を、その夜聞いたと証言する。もう一人の証人は二人を下宿させているAunt Patsy Cooperである。彼女は二人が交替で脚を使い、今週はLuigiの番であることを証言するが、それが二人から「聞いた話」であって、「事実」でないが故に、決定的な証拠となり得ない。最後に双生児が自らを弁護する証人として立ち、脚は毎週土曜の夜、12時かきりにその使用者が交替されると証言する。しかし一体今週の使用者は誰かと反対尋問を受けると、Wilsonがそれに答えるのを許さない。裁判長はその返答を要求する。しかしそうになると検察当局ですらある不安を覚え、被告に救いの手をさしのべる。つまり裁判長は最も必要ときに、法廷内での援助と協力が得られないのである。結局事件は、肝心の点が不明のまま陪審にまわされる。そして陪審の判決は「被告の一人が暴行をはたらいたのは明らかであるが、どちらが真の犯人であるかは不明であり、ただ一人に罪があるのに、両者とも罰することは出来ず、ただ一人だけが無実であるのに、両者とも無罪にすることも出来ない。つまり裁判が神の摂理に敗北したのであり、これ以上の審理は出来ない」である。裁判長が閉廷を宣言すると、人々は双生児の無罪放免に歓呼し、特に初仕事で勝訴した弁護士のWilsonを祝福する。裁判の章の最後の文章は“A happy man was Wilson”である。

このようにして終った裁判の軽妙な滑稽劇の中で、ただ一人苦渋にみちた裁判長の表情は忘れがたい。この裁判長はまだ役について2ヶ月にしかならないが、“Roman simplicity and fortitude”の持主で、人々は彼の意図するところの正しさと、その公平さと、いづれか専門の“technique”に欠ける点はあるが、“good sense”がそれを補っている事をよく知っている。実際双生児の分割審理に対するWilsonの反論を毅然としてはねつける態度など、実に見上げたものである。それが結局訴訟指揮に失敗するのである。自分が意図した罪の自白をさせることが出来なかったのである。自分はこのような不正とはきっぱり手を切ると云った後で、人々に向かって裁判長は次のように云う。

You have set adrift, unadmonished, in this community, two men endowed with an awful and mysterious gift, a hidden grisly power for evil--a power by which each in his turn may commit crime after crime of the most heinous character, and no man be able to tell which is the guilty or which the innocent party in any case of them all.

Look to your homes--look to your property--look to your lives--for you have need !¹⁰⁾

なるほど家庭や財産や生命を守るべき裁判長が、それらに注意しろと云うのは一応面白い。しかし私は引用文の下線の部分にひっかかって、どうしても単純に笑えない。「双生児の犯すどのような犯罪の場合にも、そのどちらに罪があり、どちらが無実であるか誰も見分けることが出来ない」私はこの言葉の持つ重さにたじろがざるを得ない。この言葉はそのまま此の世の現実——真実を見分けることがどんなに難しいか——に結びついているように思えるのである。それは又、不可解な人間心理の深淵と、複雑、怪奇な人間社会の荒野とを内包しているようでもある。「思わずかっとなって……」「悪魔にさそわれて……」「人が人を裁く」「神の怒り」「良心の苛責」「社会悪」「罪と罰」というような言葉が私の脳裡をかすめてゆく。しかしいずれにしろMark Twainは、この世の現実の奥底にある、どろどろした、何か得体の知れないものを意識していたのであり、我々読者がそれに気づく時、いつまでも単純に笑っていることは出来ないのである。

裁判に負けたTom Driscollは、足蹴りにされた恥辱を血闘でそそぐうともしないので、養父のJudge Driscollがそれを買って出る。果たし状はAngeloの方につきつけられるのだが、Angeloが拒絶したので、LuigiがAngeloの反対を押し切ってそれを受ける。土曜日の夜、11時近くになって血闘が始まる。時間に制約があって、急がねばならないのに——というのは、12時になると脚の使用権がLuigi からAngeloに移るからであるが——最初から医者の包帯を見ただけで気絶したAngeloの介抱に手間どったりする。一回目の射ち合いで、Judge Driscoll の一ふさの白髪が月明りの中を舞い落ち、Luigiでなくて、Angeloが腕を負傷する。二回目の射ち合いで、Judge Driscollの介添人の耳の一端がとび、再びAngeloが指関節をすりむく。三回目はやはりAngeloが頬に鋭い擦過傷をうけ、Luigiの腕は大きく狂って、自分の介添人のWilsonのあごに軽い傷を与える。結局血闘の本人達は無傷で、介添人や局外者 (Angelo) だけが負傷するという奇妙な結果になった。びくついたAngeloがその都度動いて、手もとを大きく狂わせられたLuigiは何としても我慢がならず、更にもう一度、射ち合いを希望する。静まり返った月明りの中で、最後の、荘重で決定的な射ち合いがなされようとする。その時、12時を告げる鐘の音が遠方から聞えてくる。その途端Angeloは、“Oh, you unspeakable traitor !”という Luigiの言葉を後に残して、逃げ去ってしまう。ところで二度目の射ち合いの後で、もう止めてくれと云わんばかりのAngeloに向かって、Luigiは次のように云う。

“And I want you to stop dodging. You take a great deal too prominent a part in this thing for a person who has got nothing to do with it. You should remember that you are here only by courtesy, and are without official recognition; officially you are not here at all; officially you do not even exist. To all intents and purposes you are absent

10) Ibid., p.268 (下線は筆者)

from this place, and you ought for your own modesty's sake to reflect that it cannot become a person who is not present here to be taking this sort of public and indecent prominence in a matter in which he is not in the slightest degree concerned. Now, don't dodge again; the bullets are not for you, they are for me; if I want them dodged I will attend to it myself. I never saw a person act so.”¹⁾

血闘を否定し、Luigiを代理人として立てているAngeloは、この事の“reasonableness”はよく分かる。しかし恐怖心にはどうしても打ち勝てない。云わばAngeloの恐怖心が、名誉ある血闘を滅茶苦茶にしてしまうわけである。理性ではどうすることも出来ない何か——Mark Twainはこのどたばた喜劇の中に、やはり文学の本質につながるこの何かを見据えているのであり、その立場からする血闘批判は、云うまでもなくLife on the Mississippi後篇の南部批判、有名なHuckleberry Finnのfeud（仇討ち）批判、或いはConnecticut Yankeeの騎士道批判と同質のものなのである。

血闘に対する二人の態度は、その評価の違いから町の人々を二分してしまう。一方はLuigiの勇気をたたえ、Angeloの逃走を“most scandalous”とする人々であり、他方はAngeloが良心を守るために逃げ出した勇気はLuigiのそれに勝るとも劣らないとする人々である。尚Angeloについては、血闘でうけた腕の傷にも拘らず、Baptistの洗礼をうけるために、生命の危険を冒してまで河にとびこもうとしている、つまり“Physically he's a coward, but morally he's a lion”という噂——そして実際そうするのだが——が流れ、彼の支持者達の確信を強める。そして日ならずして、Luigi派は政治団体のDemocratic partyに、Angelo派はWhigs (Republican) partyに成長する。折から町自体が市に昇格し、市長選、市議選が行なわれる。市長には対立候補なしに、Democratic partyからPudd'nhead Wilsonが選ばれる。LuigiとAngeloはそれぞれ対立陣営から、市議候補として立つ。もっともAngeloの場合、政治(Whigism)というよりは、もう少し広いReform(改革)の立場に立ってはいるが。熾烈な選挙戦の中で、情勢はゆれ動く——脚の使用権の交替、従ってどのような場所に運動の足をのばすかが肝要となる——が、いよいよ大詰になってLuigiが奥の手を出す。Angeloは絶対禁酒同盟の会長で、投票の前夜、その大集会が催され、その席上、一大演説をなすことになっていた。Luigiはそれを見こして、ウィスキーを二、三杯ひっかける。前に述べたようにAngeloには病気を治す薬であっても、自分では飲めないという弱点があって、代りにLuigiに飲んでもらっていたのだが、それは酒の場合でも同じであり、Luigiの飲んだ酒は、Angeloの方に効いてくるのである。会場への行進の時から、人々は会長がほろ酔い加減で、逆にLuigiがいやにおさまり返っているのに気付く。いよいよ禁酒についての大演説をAngeloは始めたが、ひっきりなしにシャックリにおそわれ、ろれつが回らず——本当に世の中のことはうまくゆかない——果ては突然睡魔

1) Ibid., p.273

におそわれ、Luigiの頭に頭をもたせかけて眠ってしまう。すかさずLuigiは行き過ぎた禁酒の風潮をたしなめる演説を始めるが、しかしこれにはすぐ聴衆が騒ぎ出し、いろいろな物が飛んできて、演説会は中止され、その上Luigiはほうほうの体で家に逃げ帰ることになる。結局Angeloは落選する。口で云うところの“morals”と、その実際があまりにかけ離れていたからである。しかしLuigiは市議になっても、一緒にくっついたAngeloにその資格がないために、市議場に入れない。問題は裁判にゆだねられる。その間市政は麻痺する。Luigiを除いた勢力分野が、全く互角の二つに分かれているからである。Luigiが議場に入れば、その所属する飲酒党が多数になるのであった。裁判の結果は、「Angeloは議場に入れないが、同時に正当の手続きをふんで選ばれたLuigiを、議場から占め出すことも出来ない」である。問題は上級裁判所に回されるが、判決は同じである。市政は完全に停止し、徴税も出来ず、下級吏員は飢え、辞職する。市長のWilsonはつとに金をやってLuigiに市議を止めて貰うようにと云っていたのだが、それも今となってはもう手遅れである。ほとんど困っているところに、ある市民がもうhalter（絞首索）しか手段はないと進言する。この物語の最後は次のようである。

Many shouted: "That's the ticket" But others said: "No--Count Angelo is innocent; we mustn't hang him."

"Who said anything about hanging him? We are only going to hang the other one."

"Then that is all right--there is no objection to that."

So they hanged Luigi. And so ends the history of "Those Extraordinary Twins."¹²⁾

狂想曲のようなこの社会喜劇には、色々な意味、或いは諷刺がこめられているようであるが、私はただ一つ、最後のhanging（絞殺）について述べてみたい。hangingはいくらか唐突な感じで、処置に困ったMark Twainが、無理に双生児を殺してしまったと考えられないでもない。しかしただ殺すためなら、双生児の自然死——たとえば良心派のAngeloが悩んだあげく、衰弱死し、そのためLuigiも死んでしまう——だって考えられるはずである。何故hangingでなければならないのか。私はMark Twainは政治と暴力の関係を諷刺しているのだと思う。勿論政治が暴力を最初から手段として扱う場合もあるが、Mark Twainがここで批判しているのは、それより更に深い人間社会の現実、政治がぎりぎりの所まで押し進められ、それで問題が解決出来なければ、暴力に訴えざるを得ない人間社会の現実であり、云いかえれば、したたかな現実である暴力を批判しているのだと思う。特にinnocentなAngeloを、何も彼のことを云っているのではない、ただもう一人のLuigiのことだけ云っているのだと云って、殺すところなど、暴力がもつ酷薄な面を余すところなく突いていると思う。この推察は、Mark Twainの作品に数多く見られる暴力——個人的なものであれ、人間性を無視した社会的な不正であれ——の場面から、自然に生れてくるものである。Mark Twainの遺稿であるThe Mysterious Strangerに、不思議な

12) Ibid., p.294

旅人であるSatanが三人の少年達に見せる次のような芝居がある。

By this time his(Satan's) theater was at work again, and before our eyes nation after nation drifted by, during two or three centuries, a mighty procession, an endless procession, raging, struggling, wallowing through seas of blood, smothered in battle-smoke through which the flags glinted and the red jets from the cannon darted; and always we heard the thunder of the guns and the cries of the dying.¹³⁾

双生児を殺した暴力と、Mark Twainがここで見据えている戦争とは同じものなのである。

IV

この作品の中で読みとれる諷刺は、この他にも沢山ある。例えば、結局Angeloの演説会での失敗のために実らないのだが、下宿の娘、Rowenaの次の言葉は、いわゆる恋心というものを十二分に表わしている。

“...They (Twins) 're so fine and handsome, and high-bred and polite, so every way superior to our gawks here in this village; why, they'll make life different from what it was--so humdrum and commonplace, you know--oh, you may be sure they're full of accomplishments, and knowledge of the world, and all that, that will be an immense advantage to society here. Don't you think so, ma?”¹⁴⁾

或いは勿体ぶった戯医者や、薬九層倍を諷刺するために、病名や薬草の名前を延々とつらねた誇張表現が見られる。双生児が一週間交替で使用出来る脚、その正確無比な時間の使用は、人間の条件——死は正確に我々に訪れる——を暗示しているようでもある。一人、一人に分かれていた人間を見て、“To sleep by himself, eat by himself, walk by himself--how lonely, how unspeakably lonely!”とつぶやくAngeloの言葉にも、考え込まざるを得ない。

いずれにしても「ユーモア物語は厳密な意味での芸術品、高尚で微妙な芸術であり、芸術家のみがそれを語ることができる」¹⁵⁾とするMark Twainの自負は正しい。しかも「人間的なものはすべて、憐れみをさそう。ユーモアそのものの隠れた源泉は、喜悅ではなくて悲哀である。天国にはユーモアはない」¹⁶⁾のであり、farceはtragedyと同じ土壌に根ざしているのである。笑いは又、The Mysterious Strangerの中でSatanが云っているように、この世の巨大なごまかしを一気に、こなごなに吹きとばす“unquestionably one really effective weapon”でもある。Those Extraordinary Twinsの笑いは、文字通り真剣な笑いなのである。

13) Mark Twain, The Mysterious Stranger: Edited with Notes by Keiichi Harada (The Hokusendo Press), p.107

14) Mark Twain, op.cit., p.223

15) Mark Twain, How to Tell a Story, quoted in C. Rourke, American Humor, trans. by Harashima (The Htokuseido Press) p.231

16) Mark Twain, Pudd'nhead Wilson's New Calendar in Following the Equator, Vol.I, Chap.X, quoted in 浜田政二郎, op.cit., p.94